

【歴史・民俗】

## 城山三郎と捕虜収容所

捕虜収容所跡を残す会 共同代表 池田 憲一

戦時中、ぼくの一家は有松駅で下車して三十分ほどの農村に疎開していた。中学生だったぼくは、毎日そこから勤労働員先である名古屋の工場に通った。

( 中略 )

彼女は通り過ぎる客たちの顔を、ほとんど見ない。そして、伏し目がちに改札すると、すぐ視線をホームに落す。心もち肩をすぼめ、消え入りたいような風情である。定期を改めるといふ役割に恐縮し切っているようにもとれるが、また、遠くから近づいてくる不揃いな重い靴音、その靴音の運んでくる情景を思っておびえているようにも見えた。

靴音は、駅の北側の丘陵を下りてくる捕虜たちのものである。当時そこには藪だたみの中に臨時の捕虜収容所が設けられ、香港で捕えられた二百名ほどのイギリス兵が収容されていた。彼等は、六時五十分発の電車の直前に有松駅で折返す臨時電車に乗るため、時間ぎりぎりに丘を降りてくるのだ。

城山三郎『捕虜の居た駅』<sup>(1)</sup>

### はじめに

昨年(2018年10月28日)、有志の呼びかけによって「捕虜収容所跡について話し合う会」が開催された。

呼びかけの趣意書には、「今は、多くの人々が生活の場として、日々平和な暮らしを営むこの緑区に於いて、かつて米英兵などの捕虜収容所がありました。その事は、名古屋市出身の作家・城山三郎氏の著書『捕虜の居た駅』という短編から、高校教員の馬場豊氏が丹念な取材をもとに『戯曲／捕虜のいた町』を出版され、俳優の《あまちゃん》こと天野鎮雄さん等によって上演され、多くの人々の知るところとなりました。

戯曲に出てくるお医者さんは実在の人でドラマの中でも心に残る物語となりました。そして今、収容所の施設のポンプ場らしき一部が残っていることが判明し、その場所を戦争遺跡として保存できたという声が地元からありました」とあり、以前から興味のあることなので参加したところ市・県会議員を含む29名が集まった。

私が収容所跡とともに城山三郎の文学碑の建立を主張したこともあって世話人の一人に誘われ、地域の市民運動に関わるようになったのである。

この随想は、昨秋より始まった戦争遺跡保存の活動についての報告である。

## 1. 『捕虜の居た駅』の朗読会

城山三郎の短編小説『捕虜の居た駅』の朗読会が名鉄有松駅前東丘コミュニティセンターで開催されたのは2011年5月28日のことである。

朗読は、名古屋で《あまちゃん》と親しまれている俳優・天野鎮雄氏が担当し、暖かくて深い語りによくの参加者が感銘を受けた。同時に当時のことを知っている成田治氏(有松あないびとの会代表)の証言もあり興味深い朗読会であった。

私が住んでいる地域に捕虜収容所があったことを初めて知り、その後調べてみたところ郷土史家の書いた本や『緑区誌～区制50周年記念』2014年刊、東丘小学校「創立30周年記念誌」などに記述してあることがわかった。

城山三郎が雑誌に発表しただけの『捕虜の居た駅』を発掘し、朗読会などを企画していたのは南山国際高等学校・中学校教諭の馬場豊氏である。馬場氏は、2016年4月に朗読劇「捕虜のいた町」を上演し、2017年5月に『戯曲／捕虜のいた町』(中日新聞社)を発刊している。

城山三郎が『捕虜の居た駅』を全集にも入れていないし作品年表にも書かれていないことを馬場氏は明らかにしている。

しかし、晩年の『指揮官たちの特攻』の中に同じような記述があり、城山三郎にとって大事な記憶だったことは間違いない。そして、他の作品でも有松村(実際は豊明村)の別荘のことを書いている。

## 2. 捕虜収容所跡を残す会発足

11月10日、世話人会が開催され、名称を「捕虜収容所跡を残す会」と決定し、世話人会を随時開催することになった。

11月24日に「緑区タウンミーティング」が緑区役所であり、世話人有志が出席し、河村・名古屋市長、緑区長に対して捕虜収容所跡の保存と城山三郎の事蹟を記したプレートなどの設置を要望したところ、市長からは「それはいいことだ。(区長に対して)予算が付けられないか」という発言があった。後日、緑区長(他3名)が収容所跡を見学し、案内した世話人に「状況はわかりました。本庁に報告しておきます」ということだった。

何回か世話人会を開催し、代表役員を決めて趣意書を検討して、関係者・関連組織・グループなどに活動への理解・賛同を呼びかけていった。

## 3. 戦時中の捕虜収容所の概要

### (1) 全国に捕虜収容所設置

太平洋戦争中、俘虜(捕虜)収容所が日本全国に設営され、1945年8月15日当時32418人が収容されていた。

当時、捕虜に対する私的制裁が頻繁に行われた。連合国からの抗議を受けて、濱田平俘虜管理部長は「私的制裁は個人的怨恨は殆どなく、真に俘虜の非行を矯正する為また正当防衛もしくは言語不通等から侮辱或いは反抗されたものと誤解して制裁を加えた者が多

く、中には一俘虜が他の多くの俘虜から嫌悪されて、却ってその制裁方を 依頼されたこともあった。<sup>(3)</sup>」と答えている。

1943年12月に濱田は収容所長会議で「私的制裁は日本軍隊の伝統的悪習であるだけでなく、国民的欠陥であって、一般に日本人は性極めて短気で、些細な事にも激昂し、殊に言語の不通、習慣の相違等から摩擦が生じた場合、善悪理非を考へ、合法的手段をとる事はなく感情の激するままに私的制裁を加える場合が多かった。<sup>(4)</sup>」と語っている。

米軍による空襲が激しくなった1945年になると国民生活が窮乏し敵愾心に拍車をかけ、「一方で捕虜に対する感情は極端に悪化し、公正な俘虜取扱に懸念している俘虜収容所職員を非国民であると非難し、或いはその職務を妨害し、遂には俘虜に対して軽傷ながら傷害を加えた事件が生じた。<sup>(5)</sup>」こともある。

例えば、大阪では就労先から帰所する捕虜の背後から小刀で刺突したとか、職員が捕虜優遇に過ぎると殴打されるという事件が起こっている。

函館、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡の7地区81分所(3分遣所)に俘虜収容所が設置された。国内の俘虜収容所については、「POW研究会」の調査結果が公開されている。

## (2) 名古屋俘虜収容所(鳴海分所)

1943年12月、大阪俘虜収容所第11分所として愛知郡鳴海町有松裏(現・名古屋市緑区鳴海町有松裏)に開設され、1945年4月に名古屋俘虜収容所第2分所(鳴海分所)と改められ、終戦時には273人が収容されていた。

収容人員の国別の内訳は、アメリカ189人、イギリス64人、カナダ11人、ポルトガル・オランダ各2人、その他5人。使役企業は日本車輛名古屋工場で捕虜は熱田区三本松町の工場へ電車で通勤し、鉄道車両の製造作業に従事していた。

戦後、8月29日から9月4日にかけてB29や艦載機で救援物資のパラシュート投下が鳴海分所にも行われたことを住民が目撃している。

この収容所で死亡した捕虜は22人(ア

### 日本に抑留されていた連合軍捕虜<sup>(2)</sup>

(海外も含む)

アメリカ人	17518人
オーストラリア人	11766人
カナダ人	1462人
オランダ人	32632人
イギリス人	39708人
その他	6706人
合計	109792人



戦後、米軍機が撮影した鳴海分所<sup>(6)</sup>

メリカ人4人、イギリス人16人、カナダ人2人)で死因の殆どは脚気とか大腸炎であった。そして、イギリス・カナダ人の18名は横浜市保土ヶ谷区にある英連邦戦没者墓地に眠っている。そして、鳴海分所では、B・C級戦犯として捕虜虐待及び致死寄与などで23人の日本兵・軍属が有罪判決を受けている。

囑託医として診療にあたっていた棚橋龍三氏は、医薬品不足もあって窮余の策としてお灸などの療法で治療していたが捕虜虐待の疑いで横浜の軍事裁判に呼び出された。捕虜の中にいた軍医が「東洋医学の治療法」と証言してくれて無罪釈放となったというエピソードが残っている。

#### 4. 地域への広報活動

捕虜収容所跡を残す会は、「①収容所のポンプ小屋跡と思われる遺構を、何らかの形で残し、説明プレートを設置する。②小説「捕虜の居た駅」を書いた作家・城山三郎氏の事蹟を記した文学碑(あるいは説明プレート)を設置する」の実現を目指してその活動を広く理解してもらうためにイベントを企画していった。

同時に、私は城山三郎氏の別荘を特定しようとした。「私たちが住んでいたのは、少し先に桶狭間古戦場を見下ろすゆるやかな丘陵地<sup>(7)</sup>と「豊明村間米1225番地<sup>(8)</sup>」を根拠に調査したが豊明市役所、法務局、愛知県公文書館などから証拠となる資料・文書は出てこなかった。

しかし、昭和10年(1935)年頃に分譲地として開発された「新有松豊明台」ではないかと私は推定している。城山三郎氏の実家を継ぐ杉浦秀一氏から「別荘は中京競馬場に売却したと聞いている」という証言もあるので間違いない。

##### (1) 学習会と跡地見学

4月21日、有松の棚橋家住宅(国登録有形文化財)において学習会を開催し60人が参加した。

私は収容所跡と城山三郎氏の別荘のあった場所(現中京競馬場)への案内・説明を担当した。この学習会に中日・朝日新聞の取材があり記事として大きく取り上げられた。<sup>(9)</sup>



捕虜収容所跡遺構のポンプ室基礎<sup>(10)</sup>

##### (2) 朗読劇「捕虜のいた町」再演

広報活動の一環として3年前に上演した朗読劇を再演しようということになった。天野鎮雄氏の賛同を得て再演の目処が立ったところで演出家でもある馬場氏が3年前の出演者に声をかけたところ大学生や社会人になって他県に在住する人からも熱意ある返答が来た。

会場は、学習会と同じ棚橋家住宅を使わせてもらえた。チケットの売れ行きが心配されたが新聞に取り上げられたことや世話人の頑張りでプレイガイドでも直ぐに完売となり、6月9日の上演は好評の内に終わった。毎日新聞の取材があり私たちの活動や朗読劇のことを記事にしてくれた。<sup>(1)</sup>当日の感想文のいくつかを紹介しよう。

◆天野さん、山田昌さんの演技・朗読は言うに及ばず、プロ・アマの皆さんの熱の入った芝居に何度も目頭を熱くしました。朗読だからこそ、皆さんの表情や間の取り方といった細かい表現は難しかったと思いますし、その中で虎蔵とクラーク大尉の握手には特に気持ちこもったものを感じました。有松の物語が有松で演じられることにも大きな意義があると思いますし、これからも若い世代が戦争を語り継いでいく良いきっかけとなることを願っています。

◆素晴らしい朗読劇でした。平和な時代に生きている事を心から感謝できる時間でした。ハーモニカの演奏から涙がたくさん流れました。複雑な思いをたくさんかかえ、それでも生き抜いた時代の方々の強さをとて感じました。お誘いいただき観劇できたことをとてもうれしく思いました。



出演者たちの記念写真（公演後）

## おわりに

私たちが「捕虜収容所跡を残す会」を立ち上げて活動する中で、「なぜ今ごろになって言い出すの」と言われたこともある。捕虜収容所という負の歴史を蒸し返さなくてもいいじゃないか、という訳である。

しかし、戦争遺跡のある場所を見たり触れたりすることで戦争があった歴史に関心を持ち「捕虜のいた町」の物語に想いを巡らせることができるのである。

郷土につながる戦争の記憶を、事実は事実としてとらえ恒久平和を願う積極的な意味での遺産・教訓として次世代を生きる子どもたちにつなげて、知多半島の一角にかつて捕虜収容所があって、小説にも描かれていることを広めていきたいと思っている。

## 注一覧

- (1) 城山三郎『捕虜の居た駅』（「小説「中央公論」1961年夏季号）、馬場豊『戯曲／捕虜のいた町～城山三郎に捧ぐ』（中日新聞社、2017年）所収。
- (2) 竹前栄治／中村隆英 監修『GHQ日本占領史16』（日本図書センター、1996年）
- (3) 茶園義男／編・解説『俘虜情報局・俘虜取扱の記録』（不二出版、1992年）
- (4) 内海愛子『日本軍の捕虜政策』（青木書店、2005年）
- (5) 前述『俘虜情報局・俘虜取扱の記録』

- (6) 1945年9月4日撮影。米公文書館所蔵、市民団体 POW 研究会提供。
- (7) 城山三郎『指揮官たちの特攻』（新潮社、2001年）
- (8) 井上紀子『城山三郎が娘に語った戦争』（朝日新聞社、2007年）に城山三郎宛の手紙の  
写真が掲載されている。
- (9) 中日新聞4月22日朝刊市民版、朝日新聞5月6日朝刊愛知版
- (10) 馬場慎一・土木学会会員の調査で、平面寸法は縦2.1m×横2.1m、壁厚はレンガ厚  
10cm + モルタル仕上げ1cm、レンガ寸法は幅10cm×長さ21.5cm×厚さ6cm、でポ  
ンプ室基礎、あるいは下部水槽と推定されるとしている。
- (11) 毎日新聞6月11日朝刊県内版